

フリータイム保育に関する研究 その2

固定グループとの統合保育について
 ○竹内聖絵 大松ハ重美 大塚麗 実吉明子 岩田泉
 (こどもの城 保育研究開発部)

①研究目的

フリータイム保育を実践する場合、非継続に通うこどもと保育の中核となる固定グループとの統合の問題は、保育上配慮しなければならない点のひとつである。本研究では、3歳以上の不定期、非継続に通うグループと3～5歳児の定期、継続的に通う縦割りのグループとの統合保育を行い、その保育形態、内容を明らかにし問題点を考察する。

②研究方法

登録制で非継続的に予約して通う幼児(8～10名)と継続的に通う固定グループ(22名)を同じ保育室で受け入れた。保育の方法は、自由保育を基盤としながら素材あそび、表現あそび、戸外あそび、さらに造形、音楽活動(隔週1回)・体育活動(週1回)などを取り入れた活動を行なった。その活動の中で、62年4月より1年間にわたって遊びのようす、友だちとのかかわり、保育者とのかかわり、食事のようすなどを観察・記録した。

③結果と考察

＜保育形態＞

保育担当者は複数とし、非継続に通うグループと継続的に通う3～5歳児の縦割り固定グループに保育者2～3名で対応した。

固定グループは、3年目を迎える16名と4月に新しく加わった6名により構成され、友だちとの関係、保育者との関係はかなり安定した状態にあった。

非継続に通うグループは、保育室に慣れることから始めて友だちとのかかわりや遊びの楽しさを知るなどの目標を設定し、固定グループは、遊び仲間集団を通して人とのかかわりを広げるなどの目標を設定した。

保育室では、こどもたちが入室後、自主的に遊ぶように製作、ブロック、積み木、絵本、小動物の世話などのコーナーを設定した。固定グループは、自分のやりたいことをはっきりと表現でき、自分で遊びを選択して遊びを発展させていくが、非継続に通うこどもは、保育者に依存したり、保育室に慣れてからコーナーを選んで遊びにとりかかる様子が見られた。このコーナーでの自由あそびの時間は、非継続に通うこどもにとって徐々に安定していく良い機会になったと思われる。

設定場面では、手あそび・歌・ダンスなどで楽しい雰囲気づくりをし、非継続に通うこどもがその日の活動を理解できるように内容を説明したり、名前を覚えてもらうように出席をとったりする集まりを行なった。非継続に通うこどもは、利用が2～3回目までは傍観していることが多いが、慣れてくると経験した手あそびを楽しみにしている様子も見られた。また、非継続的に通うこどもの名前を固定グループに印象づけるためにそのこどもの名前と特徴をいろいろな方法で示したりすることで、その後の活動の中で名前を呼び合ったりする姿が見られるようになった。

音楽・造形・体育の活動では、専門スタッフによる一斉指導の形態であったため、非継続に通うこどもと固定グループのかかわりはあまり見られなかった。しかし、音楽活動では音楽の持つ特性として誰にも参加でき表現活動を楽しめることから、非継続に通うこどもは、固定グループと一緒に活動することにより、その雰囲気を楽しんで満足している様子であった。一方、積み重ねの経験が必要な体育活動(プール)では、非継続に通うこどもには、活動自体が多少負担になっている様子も見られた。造形活動では、活動の内容によって非継続に通うこどもが楽しめる度合いが違っている様子であった。粘土のような感覚に訴える活動は、内容を理解していなくても楽しめる要素があるが、木工などのような活動では、まず道具を何の目的で使用するのかわかる必要がある。非継続に通うこどもは、十分に理解できず途中であきたり、保育者の手助けなしでは活動できなったりする様子も見られた。

食事については、給食・お弁当のどちらかを選択できるような形態をつくり、固定グループは週2日の給食、週2日のお弁当にし、非継続に通ってくるこどもは、予約の際、給食かお弁当かの選択をした。昼食時、固定グループと非継続に通うグループの間に、お茶をつぐ世話をしたり、お弁当の包みのひもをといてやったり、給食のおかずをめぐって話題が発展したり、さらに、非継続に通うこどもが固定グループのこどもに関心をもち、次回はお弁当を持って来たいというなどの両グループの交流する姿が見られた。

家庭連絡に関しては、非継続に通ってくるグループに対して、母親にその日の活動の様子を伝え、母親か

ら家でのこどもの様子を聞いた。また、次回も安定して過せるように利用のし方を相談した。

＜保育上の配慮点＞

保育活動場面、内容で配慮した点、工夫した点を以下に示す。

(1)生活

a.受け入れ

非継続に通うグループには、利用票の提出により緊急連絡先などの事項を確認し、母親より口頭で最近のこどもの様子を聞き、こどもの様子も把握する。こどもには、「困ったことがあったら先生に言ってね。」などの言葉かけをし安心させる。くつのしまい方、ロッカー、おもちゃの置いてある場所などの保育室でのきまりを伝える。また、非継続に通うグループを担当する保育者を固定したり、小動物の世話、簡単な製作などとりかかり易い活動を準備することでこどもに安心感を与えるようにした。

固定グループには、必ずことばかけをしたり、こどものからだに触れたりすることで保育者とのつながりを確認させるようにした。

b.食事

非継続に通うグループのこどもは、自分の席がみつけれず不安そうなので、どこに座りたいか尋ね一緒に席を決める。また、固定グループのこどもからお茶を入れてもらうなどのかわりがあった場合、「みっちゃんよかったね。たけし君はやさしいね。」などの言葉かけをし、関わりを促進する。

固定グループには、食事の準備をする際、「とおる君、えりちゃんを手伝ってあげてね。」などの言葉かけをし、非継続に通うこどもとの関わりを促進する。

c.排泄

非継続に通うこどもには、保育者がついて行ったり、固定グループのこどもと行くように働きかける。

(2)保育室での活動

a.自由あそび

非継続に通うグループのこどもには、入室時の状態を見て各コーナーに誘ったり、安定するまで保育者が個別対応する。また、決まったおもちゃを用意しておくなど前回と同じ場所を設定し、保育室の中で安定できるきっかけを作る。

固定グループには、製作の手順などを非継続に通うこどもに教えてかかわれるように「なおちゃん、みどりちゃんに教えてあげてね。」などの言葉かけをする。また、5歳児のこどもたちには、同年齢だけで行うことば遊びや5歳児のための製作などの活動を用意して

意図的に年長児としての対応をしたり、保育者との密接な関係を持てるような場面を用意した。

b.朝のあつまり

非継続に通うグループには、皆に名前を覚えてもらうために、そのこどもの特徴と名前を言ったり、インタビューごっこなどを行なう。また、誰とも知っているような歌と一緒に歌うことで安心感を与える。

固定グループのこどもには、非継続に通うこどもの名前をこどもを通じて呼ばせたり、名前あてゲームなども行い名前を印象づけるようにした。

c.食後の自由あそび

非継続に通うグループは、食後は気持ちも安定しており、固定グループとの遊びに誘うと参加しやすい状態があるので保育者が仲立ちになり、ごっこあそびや鬼あそびなどの集団あそびを積極的に展開する。

固定グループには、新しい友だちへの好奇心をほぐくみ、その楽しさがわかるように働きかける。

(3)音楽・造形・体育活動

非継続に通うグループのこどもには、保育者が個別にかかわる場面を多くして、課題の達成度をそれぞれに配慮した。

固定グループには、困っている友だちを助けたり、励ましたり、自分以外の人への思いやりを持てるように働きかけた。

④まとめ

非継続に通うこどもは、積極的に友だちとかわることよりも保育者とのかわりを求めることが多く、固定グループと一緒に遊ぶことが少なかった。また、固定グループは、自然にグループとしての関係ができていたが、非継続に通うこどもも無視したり、「あんただれ?」「あっちへ行って」などの言動が見られた。非継続に通うグループと固定グループとのかわりを持たせるために主に配慮したのは、①両グループがかかわれるような言葉かけを多くする。②非継続に通うグループが安定できるように決まったおもちゃなどを用意する。③保育者が、ごっこ遊びのような集団遊びの仲立ちをする。④固定グループが安定できるように特別なプログラムを用意する。以上の4点であった。しかし、どの場面でも同じようにかかわりを促進していくことは適当ではなかったと思われる。特に、音楽・造形・体育活動では、個々が集中して行なう活動であったため、その場面でも同時にかわりをも育てようとしても無理であった。また、固定グループにとって、日々異なるこどもを受け入れていくことが時には負担に感じることもあったと思われる。